

令和8年度 議会地域懇談会（黒川地区）

令和8年6月17日（水） 黒川ふれあいセンター

参加人数 59名

テーマ「どうする黒川 みんなで動かす地域の未来」

テーブルごとの意見まとめ

■ 地域の伝承プロジェクト（1番テーブル 伊佐治副議長）

白川茶の手摘みや手揉み、家庭ごとに異なる味わい、獅子舞やお囃子など、黒川に受け継がれてきた暮らしと文化の魅力が語られました。一方、お茶農家や伝統芸能の担い手の減少、中学校再編後子どもが伝統芸能へ参加しづらくなる懸念が示されました。移住者や地域外の希望者も気軽に参加できる仕組みを整え、獅子舞などを披露する機会を設けることで、地域全体で楽しみながら継承していくことが提案されました。下の名前で呼び合う親しみある関係も、黒川らしい魅力として挙げられました。

■ 営農組合再構築プロジェクト（2番テーブル 野尻議員）

営農組合では、役員やオペレーターの高齢化、農地や水路の管理、組織運営の負担が課題として挙げられました。四つの組合の連携や一本化を検討するとともに、移住者や有機農業を志す人、白川ワークドット協同組合との協力が提案されました。田植えや稲刈り、農業機械の操作を体験イベントにすることや、空き家を活動拠点として活用する案もありました。農法の違いを尊重しながら、知識や機械、農地を共有し、おいしい「白川の米」のブランド化と里山景観の維持につなげることが期待されました。

■ 尾平山荘復活プロジェクト（3番テーブル 杉山議員）

尾平山荘は建物の利用は難しいものの、電気・水道が使える、キャンプやバーベキュー、釣りを楽しめる環境が残されていること、黒川地区には民泊はある一方でキャンプ場が不足していることから、一定の需要が見込まれるとの意見が出されました。まずは協力者を募って運営チームをつくり、できる範囲から再開することが提案されました。地ビール、有機野菜、あんしん豚、黒川鶏ちゃん、バレルサウナ、山歩き、東座歌舞伎など地域資源と組み合わせ、連泊につなげる案もありました。町外の人にも整備段階から参加してもらい、黒川に愛着を持つ仲間を増やすことが期待されました。

■ 役の負担軽減プロジェクト（4 番テーブル 三戸議員）

世帯数の減少や高齢化により、一人が複数の役を担うなど、地域の役職が大きな負担になっているとの意見がありました。北黒川で行われた役の見直しを参考に、役そのものの必要性、人数、地区割り、行事への出席などを一つずつ検証することが提案されました。経験者の意見を聞く場や検討委員会を設け、将来を見据えて継続的に見直すことも必要とされました。集金方法の工夫やLINEの活用、オンライン会議なども取り入れ、必要な活動を残しながら負担を軽くすることが望まれました。

■ 情報発信プロジェクト（5 番テーブル 佐伯議員）

地ビールやお茶摘み体験、祭りへの移住者の参加など、黒川では地域資源を通じた交流人口づくりが進んでいる一方で、「どうする黒川」の活動を地域内に広く知ってもらい、参加者を増やすための情報発信が課題とされました。地域内では回覧や口コミ、町外にはSNSを活用し、黒川のお茶や地ビール、歴史など、特定の関心を持つ人に届く発信が提案されました。空き家情報を住民自ら集める取組や、移住者が段階的に地域になじめる「準会員」制度など、黒川らしい柔軟な受入れを生かす意見もありました。

■ 山を活用したプロジェクト（6 番テーブル 梅田議員）

山に入る人の減少や林業の担い手不足により、森林の荒廃や鳥獣被害、山への関心の低下が課題として挙げられました。山頂や昔の遊び場を整備してハイキングや子どもの自然体験の場とするほか、林道・作業路の整備、針葉樹の伐採と広葉樹の植樹などが提案されました。「年に一度は自分の山を見る」取組や、どんぐり会などの地域団体を活性化し、住民が山に関わる機会を増やす案もありました。山頂整備、道づくり、鳥獣対策など、着手する取組を地域で選び、できることから進めることが望まれました。

■ 空き家・空き店舗利活用プロジェクト（7 番テーブル 藤井議員）

黒川で働きたい若者や移住希望者がいても、借りられる住宅が少ないことから、空き家が良好な状態のうちに地域で情報を共有し、活用につなげる必要があるとの意見がありました。また、飲食店の減少を踏まえ、空き店舗「みなかや」を活用し、曜日を限定した食事の提供や交流の場をつくる「みなかやプロジェクト」が提案されました。料理人や移住者、地域住民が協力し、空き家・空き店舗を新たな暮らしや仕事につなげるとともに、移住希望者に対しては地域での付き合いや役割を分かりやすく伝えることも大切とされました。

■ その他やってみたいプロジェクト（8 番テーブル 田口議長）

少子化や学校再編により、子どもが地域から離れ、将来の担い手が減ることへの不安が示されました。一方、黒川の特色を生かし、子どもを蚊帳の外に置くのではなく、子どもを含めて地域の未来を考えることが大切との意見がありました。小中学校を地域に残し、学ぶ場所を選べる仕組みや、VAMOS KUROKAWA など地域の活動を通じて子どもの経験を補う案が出されました。自分の家や地域の将来を若い世代と一緒に考え、黒川で育つ子どもが地域への愛着や役割を持てる環境づくりが望まれました。

黒川地区のまとめ・特性

黒川地区では、各テーブルで具体的なテーマ（プロジェクト）を設定し、役の負担軽減、農地や山の活用、伝統文化の継承、空き家の利活用など、地域の将来に向けた幅広い意見が交わされました。移住者の参加、地ビールやお茶摘み体験などの交流、地域住民による空き家情報の共有など、黒川ならではの前向きな動きが見られました。全体を通して、地域の課題を行政や一部の担い手だけに任せるのではなく、地域内外の人が関われる仕組みに組み直していく姿勢が示されました。今ある資源や人のつながりを生かしながら、移住者や地域外の人も巻き込み、無理なく続けられる仕組みへつなげようとする提案が多く見られました。